第二章

解明創発（かいめいそうはつ）

バリ島の巨竹打楽アンサンブル〈ジェゴグ〉の実像は、バリ島外ではほとんど知られていません。さらに、芸能山城組がこのジェゴグにほどこした創発的改良について、本格的に公開したことはありませんでした。

〈逢燦杰極（アキラじぇごぐ）〉の初演に先立つ第二章では、ステージ上のジェゴグを眼前で解体してその秘密を解きあかし、それをステージ上で再び組み上げて打鳴します。

バリ島の伝統的なジェゴグ

竹製打楽器アンサンブル〈ジェゴグ〉(jegog) は、鍵盤打楽器の一種で、バリ島西部ジュンブラナ県固有の芸能です。14台のアンサンブルを基本とし、最大の楽器も〈ジェゴグ〉呼ばれます（図1）。5オクターブに及ぶ幅広い音域をカバーし、なかでも低音は約50ヘルツという非常に低い音を出すことが

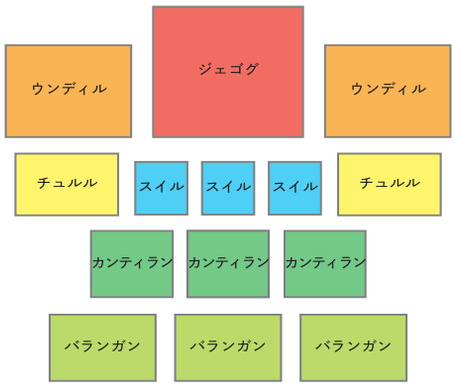

図１　ジェゴグの典型的編成と各楽器の名称

可能です。１台の楽器は８本の鍵盤をそなえ、最も大きなジェゴグの鍵盤は、東南アジアを中心に分布する通称ゾウタケ（学名デンドロカラムス・ギガンテウス）と呼ばれる巨大な竹を素材としています。竹を叩くバチは、ゴムや木でできたものを使い分けます。低音を担当する巨大なジェゴグの枠の上に座って重いバチを振り上げて叩く演奏方法は、ジェゴグ独特のものです。青銅製打楽器アンサンブルのガムラン同様、二人一組となって演奏する入れ子奏法（コテカン）がしばしばとられ、完成された旋律を分担して弾くこの技法で、一人で弾くことができる倍のスピードでの演奏を実現します。

竹を半年ほど乾燥させたのち、根の部分を切り離して節（ふし）を取り除き、鋭いナタで削り出し、上部を打鍵部、唯一節を残した底部を共鳴管とします（図２）。木製の枠には飾り板や彫刻など大変華やかな装飾が施され、祝祭的な雰囲気を醸しだします。

竹筒鍵盤の打鍵部の先端に小さな穴をあけて紐を通して吊り下げ、また共鳴管の下に紐を渡して乗せて支えます。打鍵部をバチで叩くと、共鳴管で音が増幅されるうえ、竹筒が宙に浮いている構造によってその響きが保持され、独特の豊かな響きを生むのです。

ジェゴグの音階は基本的に、４音で構成されます。低音域を担当する楽器では１台の楽器に同じ１オクターブ（４音）の竹筒鍵盤が２セット（図３上）、中高音域を担当する楽器では２オクターブの竹筒鍵盤がセットされています（図３下）。同じ音程の２本の竹筒は、若干音高がずれるように調律（デチューニング）されているため、同時に打鍵した音は空気中で〈うなり〉（差音）を生じます。こうしたデチューニングはガムラン楽器で基本的に発達しました。名人の手によって生み出されるジェゴグの銘器の独特のうなりは、演奏者と聴衆を陶酔させるバリ島独自の伝統の技です。

（藤田奈比古・渡邊有晴）

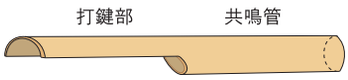

図２　竹筒鍵盤の構造

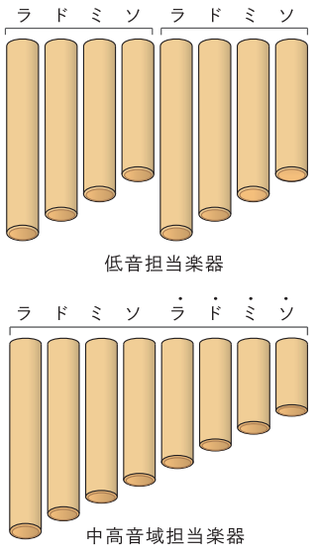

図３　４音階ジェゴグの鍵盤例
（音名は近似的に表現）

芸能山城組によるジェゴグの構造革新

１　ジェゴグの保持骨格の強化

竹筒鍵盤を支える楽器の保持骨格は、特に巨大ジェゴグでは、目の詰まった重い熱帯固有の木材で堅固に造られていて、発音体の巨大な竹筒とその上に乗った演奏者二人を安定して保ち、音をよく響かせるのにきわめて効果的です。

ジェゴグの４音階それぞれの音の高さは、現代社会で支配的な十二平均律（ピアノの調律）とは一致せず、またアンサンブルによってチューニングが微妙に異なります。そのため、現代の音楽シーンに通用する楽曲を生み出すには、音律が不適なうえ、音数が不足していることを否めません。そこで、バリ島伝統の４音階にもう１音を加えることによって、ジェゴグ伝統の響きを活かしつつ、より自由度の高い演奏を可能にすることを図りました。たとえば、竹筒鍵盤を４音（あえて近似的に音名を記すとラ・ド・ミ・ソ）から１本ずつ増やして、５音（ラ・ド・レ・ミ・ソ）にすることです。

しかし、竹筒鍵盤を追加するためには、楽器骨格をより堅固にすることが必須の課題となりました。そこでさまざまな試行実験を繰り返した結果、竹筒を吊る枠の材質を木材から鉄材に造り換えて、強度と剛性とを強化することが有効であることを見出しました。

そして、人の耳に聞こえない帯域に及ぶ重低音を生み出す最大の楽器ジェゴグには、鉄製の柱をその骨格に導入して、竹筒鍵盤を増やしても楽器骨格の強度と剛性とを減じることがないよう大改造を施しました。

2　鍵盤の架け替えによる互いに異なる音律の実現

作曲の自由度をより高めて楽曲の多様性を実現するためには、さらに鍵盤を増やすことが有効と期待されます。しかし、竹筒鍵盤が大きく重い低音楽器では、鍵盤を増やすと楽器骨格に与える負担が大きくなるという困難に直面しました。そこで、低音楽器の鍵盤の数は増やさず5音のまま、1音だけを別の音高に変えて、ジェゴグ本来の響きを保ちつつ趣の異なる音律をつくりだすことのできるオリジナルの構造を開発しました。

そして、低音楽器の竹筒鍵盤を別の音の竹筒鍵盤に架け替えられるように改造しました。一方、竹筒鍵盤が比較的軽く楽器骨格に与える負担が少ない高音楽器は1オクターブ6音の竹筒鍵盤で構成し、楽曲によって演奏する5音を選択する形態を採っています。

（前川督雄）

〈杰極（じぇごぐ）〉の創発

バリ島のジェゴグは、ほとんどの場合、竹の楽器だけで演奏され、他には稀に、ガムランでも使用されるクンダン（太鼓）や金属打楽器チェンチェンが加えられる程度です。また、グループ対抗コンペティションで演奏される際には、チューニングが互いに異なるジェゴグ・アンサンブルが、異なる曲を同時にぶつけ合うように演奏し、最後まで乱れず演奏しきった方が勝ちという闘いのなかで、クライマックスには耳を聾するばかりの爆音に人々は熱狂します。

一方で、このジェゴグというアンサンブルは、どこで音がしているのか、楽器の音なのかどうかもわからない、森が歌っているかのような静かな持続的な響きも奏でることができます。打楽器アンサンブルとしては驚異的な表現の幅をもち、しかもそれが重低音を特徴とする点で、世界に類のないものといえるでしょう。

こうしたジェゴグの特性を活かして創出された、ジェゴグを核心とする新しいオーケストラが〈杰極（じぇごぐ）〉です。その音律は、バリ島伝統の4音音階を母体としつつ、多くの人が慣れ親しんだ音律とも調和する独特のものになっています。その結果、シンセサイザーなどの電子楽器、太鼓などの打楽器、人の声までをジェゴグが共生させるという離れ業が実現し、伝統を生かしつつ、バリ島の伝統音律による竹の打楽器アンサンブルという枠組を超えた、世界の現在の音楽と呼ぶことのできるまったく新しい芸術様式が生まれました。

〈杰極（じぇごぐ）〉の誕生と、作曲者山城による新たな作品の創出とにより、バリ島のジェゴグに潜在していた表現力が次々と顕在化し、それは現在も開発の途上にあります。

ジェゴグは、一番大きな楽器〈ジェゴグ〉から一番小さな楽器〈スイル〉までがユニゾンで演奏することにより最大の重低音が生まれます。そして、全楽器ユニゾン、またはメロディラインパートと装飾パートにわかれ、それぞれが入れ子奏法で演奏されるという、比較的シンプルな方法で演奏されます。この基本コンセプトに学びつつ、新たに開発した演奏法を組み合わせて、より多彩な表現が生み出されています。今日は、その〈杰極（じぇごぐ）〉のはじめての到達点を披露します。

（小野寺英子）